

ジャパンリビルト（田中勝弘社長、堺市）が将来の持続的成長に向けて事業基盤を固めている。このほど同市内に新設した新工場が本格的に稼働し、昨今、需要が高まっているトラック部品の生産強化に乗り出している。

中長期的に国内市場の縮小が避けられない中、高い生産効率と即時納入体制を実現する新工場が同社の事業発展を支える強力な原動力となりそうだと、

（水町 友洋）

持続的成長へ事業基盤の整備着々

営業品目は業界屈指の27アイテム

同社の設立は1980年9月のこと。創業者である田中社長は設立からさかのぼること10年前の1970年に大阪市住吉区で自動車部品再生業を開始した。75年に車身渡来し、オートマチックトランスミッションのリビルド技術を習得。翌76年には同部品のリビルド事業を手がけ始めた。

それから40年。現在の営業品目は27アイテムに及ぶ。同社の歴史は生産部品の品目拡大の歴史でもあり、今ではドライブシャフト、ミッション、パワーステアリング、エンジン、電装品、気化器関連を多岐にわたり高品質のリビルドパーツを提供している。2000年にはドライブシャフトの新品生産ライン工場を建設しており、「コアがなくても出荷できる」（田中社長）生産体制を整えたことも同社の大きな強みとなっている。

苦境こそチャンス

一方で、同社が業をなす自動車リサイクル部品業界を取り巻く環境は厳しさを増している。縮小する新車需要や堅調な中古車輸出、平均使用年数と車齢の高齢化、中古車流通経路の変化などを背景に使用済み自動車（ELV）の発生

減が続く、廃車仕入れ価格の高止まり、スクラップ相場の低迷も向こそチャンスがある」と強調す。また、ハイブリッド車や電気自動車など次世代車両への対応も求められている。こうした状況に対し田中社長も「このままでは業界は尻すぼみになる」と危機感を強めている。「現状だけを見ていては厳しくなる一方、将来を見据えて動いていかねばならない」経営環境下にあることも新工場の新設を後押しし

減が続く、廃車仕入れ価格の高止まり、スクラップ相場の低迷も向こそチャンスがある」と強調す。また、ハイブリッド車や電気自動車など次世代車両への対応も求められている。こうした状況に対し田中社長も「このままでは業界は尻すぼみになる」と危機感を強めている。「現状だけを見ていては厳しくなる一方、将来を見据えて動いていかねばならない」経営環境下にあることも新工場の新設を後押しし



今後は新工場と同様に、既存工場の近代化も図る計画だ



ゆとりある作業環境を整えた



コアや商品を保管する広大なスペースも完備

る。多彩な営業品目に加え、昨今の需要拡大に合わせ強化しているトラック部品、そして最新鋭の新工場を武器に苦境を乗り越え、事業拡大を目指す。



田中勝弘社長（右）と田中昭統括工場長

新工場は和泉自動車検査登録事務所近隣に位置する。敷地面積は約6600平方メートル。駐車場を含め8250平方メートルを超える大規模工場を新設した。オフィス家具を取り扱う企業の居抜ききたる。新工場では需要が増えているトラック部品の生産を担うという。エンジンやミッション、触媒などを集中的に生産し豊富なコア在庫も含め即時納入体制を整える。工場内は洗浄や分解、組み立てといった一連の部品生産フローを効率的で生産性の高いものにするため動線を最大限に配慮したレイアウトを採用。また、各種テストや最新の洗浄機器も新たに導入するなど、今後の事業拡大を見据えた生産基盤を整えた。また、工場には見学者用コースも設けている。

ウエブサービスで部品検索、今後は発注も
同社は昨年3月、在庫やコアの状況、金額などが確認できるウエブサービス「ジャパンリビルト商品検索システム」を立ち上げた。今後はシステム上で部品発注もできるようにするという。リビルド部品の生産体制強化とともに効率的な供給体制も整えることで、より品質の高い商品を即時納入体制で提供していく考えだ。

ジャパンリビルト（堺市）

トラック部品の生産強化

リサイクル
北から南から

新工場で生産効率上げ即時納入